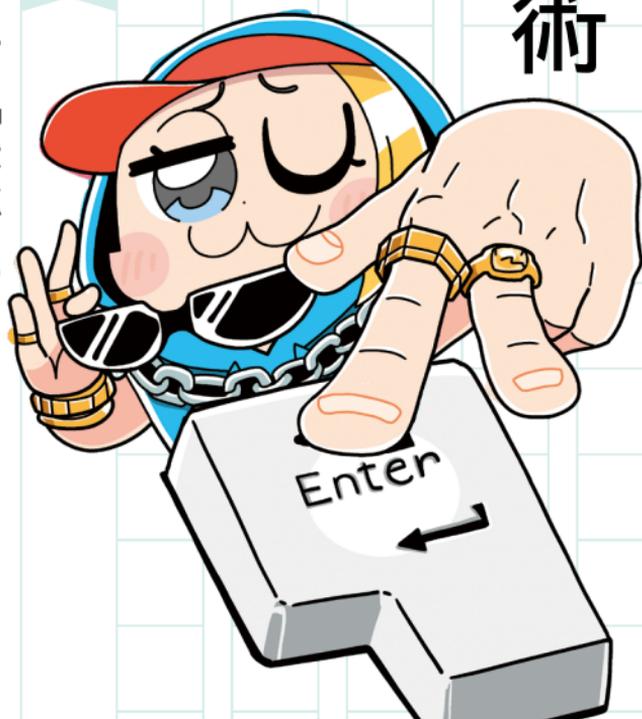


みんなのユニバーサル

文章術



今すぐ役に立つ「最強」の
日本語ライティングの世界

安田峰俊

「本書は、文章力を
身につけて人生を
ハッピーにしたい人
のための戦略の書だ」

毎日の
メールやレポート、
LINE、note、
からLINE、note、
Twitter、マッチングアプリに
活用せよ……！
(本文より)

大宅賞作家にして1記事2000万PVをバズらせる第一線のライターが

あなたの仕事と人生を切りひらく令和の文章術を解き明かす!!

みんなのユニバーサル文章術

今すぐ役に立つ「最強」の
日本語ライティングの世界

安田峰俊

星海社

208



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

35歳既婚サラリーマン、1年間の著作15冊

あなたは1日に何文字の文章を書いているだろうか。

まったく書いていないって？ いや、そんなはずはない。よく考えてみてほしい。

たとえば、あなたが35歳の既婚サラリーマンであると仮定しよう。

朝起きてから寝るまで、家族・友人や同僚に送ったLINE（や類似サービス）のメッセージは、「7時半までに帰る」といった生活上の連絡や、職場のトークグループ内での書きこみ、さらには「うん」「わかった」程度の相づちやスタンプまで含めると、なんだかんだで50通くらいに達するはずだ。たとえメッセージ一本の平均文字数が10字くらいでも、1日の合計は5000字である。

さらに出勤後はどうか。

日本ビジネスメール協会による2019年の調査によると、ビジネスマンの1日平均の送信メール数は「11・59通」だという。1通あたりの平均文字数を300字と仮定しても、約12通を送信すれば3600字だ。社内でプレゼン資料を作ったり日報の記入をおこなったりしていれば、さらに1000字以上は書いている。

平日1日の文字数は、すくなくとも約5000字。土日は完全に業務を休んでいても、SNSでのコミュニケーションやフリマアプリの値段交渉、グルメサイトのレビュー投稿など、なんだかんだで1000字くらいは書いている。

1週間を通じて計算すると、あなたの文字数は3万字にせまる。1年間だと、祝日やお盆休みによる休業を考慮しても140万字以上に達する。

ちなみに、この星海社新書のような「新書」と呼ばれる形態の書籍の文字数は、1冊あたり8万〜12万字くらいだ。

どこにでもいる35歳の既婚サラリーマンであるはずのあなたは、実は1年間で新書15冊ほどの分量の文章を執筆している。

別の人物で考えてみよう。

仮にあなたが現在20歳の「ツイ廃」(ツイッター大好き)の女の子だったとする。

新しいサロンの感じちがうっておもいながら切ってもらったら前髪ガタガタだし切りすぎだし辛みチキン

(現代語訳…新しく開拓した美容室に行き、違和感を覚えながら髪を切られていたが、できあがりを見ると前髪が短すぎるうえ長さがそろっていなかったので大変つらい)

このような内容を1日に20本、平均50字ずつツイートすれば、合計は10000字だ。1年続ければ36万字である。さらにLINEやインスタグラムなども利用しているとするれば、あなたが年間トータルでスマホに打ちこんだ文字数は、おそらく新書10冊分か、それ以上になる。

また、このツイ廃女子のアカウントに、フォロワーが2000人いると仮定しよう。

「ねむみ」(≡眠い)といった、情報量がほとんどない3文字のツイートでも、理論上は200人があなたの言葉を読んでいる。のみならず、投稿がリツイート(転載)された場合

は、数千〜数万人の目に触れる可能性さえある。

これはものすごい数だ。通常、書店に並んでいる商業出版物の初版部数は、話題作でない限りは数千〜1万部程度である。学術書では数百部という例もある。

あなたの「ねむみ」は、プロの作家が人生を削ってコツコツと書きあげ、ようやく出版にこぎつけた書籍よりも、ずっと多くの人のもとに届いているかもしれないのだ。

私たちは人類史上で最多の文章を書いている

さらに驚くべき事実も指摘しておこう。

いまが約4半世紀前なら、あなたは文章をほとんど書いていなかったはずなのだ。

たとえば1995年、日本の携帯電話の普及率は9.4%だった。LINEが存在しなかったのももちろん、移動端末から安価にインターネットに接続することもむずかしい時代である。同年末のウィンドウズ95日本語版の発売まで、一般家庭にはパソコンすら普及していなかった。

通信手段のメインは固定電話だ。文章を他人に送る方法は、手紙と電報とファクシミリ。もしくは駅の掲示板にチャックで要件を書くか、隣の家に戻覧板を回す。ポケットベルの端末にテキストを送る場合も、多くの機種では数十文字以下の送信がせいぜいだった。

小説執筆が趣味でもない限り、当時の日本人がプライベートで書いていた文章は、手紙と年賀状と日記くらいだ。業務用の文章作成装置としてはワープロが普及していたが、一般的な社会人が1日に書く文字数は、やはり現在よりずっとすくなかった。

そんな一昔前の日常から考えると、スマホとSNSによって人々がなかば無意識的に大量の文章を生産し続け、それが不特定多数の人間に読まれているという現代人の「当たり前」の暮らしは、実はかなり異常である。

現代はどういう時代なのか。それは人類史上でも桁違いに大勢の人が、ありえないほど多くの文字数を日常的に書くようになった時代なのだ。

ゆえに現代社会において、文章力や情報発信能力を持つ意味は大きい。

たとえば、ガイドブックを持たずに観光地に行ったときを想像してほしい。スマホで「伊香保 食堂」「瀬戸市 陶芸体験」などのキーワードで検索して、公式ツイッターやインスタグラムなどが人気を集めている店舗をたずねる人も多いのではないだろうか。

これは店舗の視点からみると、同じサービス内容の複数の業者が競合している場合は、文章が上手な者、情報発信がたくみな者が生き残ることを意味している。魅力的なメッセージの発信がどれだけ大事かは言うまでもない。

もちろん勤め人でも文章力は重要だ。

メールやメッセージングソフトで、相手に意図が簡潔に伝わる文章を書ける能力は、業務を効率化させる鍵になる。

また、休日の気晴らしに使っているSNSで多くのフォロワーを集めたり、記事が盛んに読まれたりすれば、ときには小遣い稼ぎにつながったり、転職や独立のきっかけになることもある。

——ただし、逆に損をするケースも増えた。

ビジネスの場で明らかに言葉足らずな文章を書いていけば、顧客や上司・部下の信頼を失う。たとえ功成り名を遂げた経営者や著名人でも、メールやSNSの文面がヘタクソすぎると、他人から無用なあなどりを受けてしまう。異性に送ったLINEの文面が気持ち悪かったので距離を置かれる、配偶者に送る文面が支離滅裂で、家庭内がギクシャクするといった状況もありえる。

それにもかかわらず、どんな人でも外部向けに文章を書かなくてはならない。それが現代のご時世なのだ。

もつとも、一般人にとって便利で良質な文章術の本は意外とすくない。

いや、文章術それ自体は、谷崎潤一郎・三島由紀夫・井上ひさし……と、過去に多くの大作家がこのテーマに取り組み、とっておきの文章理論を現在まで伝えていく。

しかし、これらは文学的な価値は高いものの、必ずしも「使える」わけではない。

いまは当時と違って、文学の道を志しているわけでもない普通の人が、往年の大作家に匹敵する分量の文章を日常的に書いている変な時代なのだ。当然、私たちが文章を書く媒体や目的は大文豪たちとは異なっている。ゆえに求められている文体も違うはずだ。

いっぽう、「フリーライター入門」のようなビジネス書には実用的な本もある。しかし、世間の普通の人たちには、それでも目的に合わない場合が多いだろう。

普通の人たちは、ライターとして身を立てたり、マスコミで働きたかったりするわけではない。業務上のメールやレポートで「伝わる」文章を書きたい、SNSで「バズる」文章を書きたいといった需要のほうはずっと大きいはずなのだ。

私が本書を書く理由は、まさにこの点にある。

この本が伝えたいのは、令和の日本に生きる一般人であるあなたが、身につけて必ず得をする文章術、そして現代人が文章と付き合うコツである。

私の強みは文章が書けることだ

では、そんな文章術を伝える私は何者か。簡単に自己紹介をしておく。

私は自分の文章をカネにかえて16年、自分の名前で著書を出して12年目の文筆業者だ。

2018年に刊行した『八九六四 「天安門事件」は再び起きるか』（KADOKAWA）が、複数の賞を受賞した。そのうち日本文学振興会が主催する大宅壮一ノンフィクション賞は、小説の分野でいう芥川賞や直木賞に相当する。ゆえに近年、私は世間でそこそこの知れたジャーナリストやルポライターであるともみなされている。

もともと、経歴には紆余曲折がある。

まずは新卒で入った会社を5ヶ月で辞めてぶらぶらしていたときに、1文字1円以下の

ウェブ記事の作成を引き受けてキャリアをスタートした。怪しげな情報商材や物販サイトの文字埋めをおこなう、業界の最底辺の外注労働者だ。

やがて、文章とは無関係な非正規労働に従事しながら副業にいそしんだ。当時はコンビニ売りの歴史ムック本やアングラ本の原稿を、編集プロダクション（出版社の下請け会社）を通じて格安で受注して、大量に書いている。

これらと並行して中国に関係したブログを運営していたところ、28歳のときに講談社から本を出した。その後もしばらく安定しなかったが、2014年ごろから中国をはじめとした海外取材のルポものの仕事が増えた。

2022年1月現在、私の著作は単著だけで15冊くらいあり、大部分が大手出版社から刊行されている。自分から積極的に営業をかけなくても仕事は途切れなし、年収も大手企業のサラリーマン並みにはあると思う。出版不況にあえぐ現代日本のフリーライターとしてはかなり恵まれている。

ちなみに、私は世間では中国問題が専門の書き手だとみなされている。

ただ、実は私の中国語のレベルはそこまで高くない（たとえば同時通訳はできない）。普段は日本で暮らしているので、現地事情をリアルタイムで把握することも限界がある。

プロのライターとしての自分の本当の強みは、語学力や中国の知識ではない。いちばんの売りは文章を書く技術、次に企画や取材の能力それ自体にある。

私は過去、ライター養成学校に通ったり記者教育を受けたりしたことがない。

私の文章術は、あらゆる文章をカネにかえて日銭を稼ぐなかで自然と身につけたものだ。

いわば、血で血を洗う戦場で身につけた傭兵の戦闘術——。と書くとカッコいいが、傭兵とはつまり、コストがかかる正規兵のかわりにいくらでも使い捨てがきく消耗品だ。名もなき外注ライターは、別の人間でも代替が可能な部品であり、原稿の発注者（編集者）からいつでも切り捨てられる。

そんな世界で生き残るために何より重要なのは、発注者に嫌がられないことだ。

求められるのは、可能な限り簡潔でわかりやすい文章である。

余人を以て代えがたい大作家の原稿なら、多少は読みにくくても編集者や読者は真面目に向きあってくれる。だが、ただの「道具」が提供する製品に、そんな尖った表現は必要ない。文章をカネにするとはそういうことなのだ。

もっとも、文章それ自体が非常にわかりやすければ、たとえ突飛なテーマの記事や書籍

を書いても、ちゃんと商品になって読者に支持されるという経験もやがて知った。ゆえに私はライターとして、頭ひとつ抜けることができた。

文体や単語の選択、句読点の使いかたや改行といったユーザーインターフェースは、限りなく平易でとっつきやすい設計にする。そのうえで、自分の個性を反映したときは企画のテーマや文章の内容で示す。

これが現在の私の姿勢である。

本書が伝えるのは、令和の現代に日本語を母語としている人がもつともサクサク読めて、文意を容易に伝達できる文章の書きかただ。

そんな文章のことを、私は「ユニバーサル日本語」と呼ぶことにした。詳しくは第1章からみっちり説明していこう。

ユニバーサル日本語の文章術は、情報の伝達コストを下げ、あなたの人生の効率性を上げる。誰もが情報発信をおこなっている時代だからこそ、わかりやすい文章を書ける人が生き残る。

私はあえてそう断言する。

目次

はじめに 3

35歳既婚サラリーマン、1年間の著作15冊 3

私たちは人類史上で最多の文章を書いている 6

私の強みは文章が書けることだ 10

第1章

誰でも読める

「プロの日本語」を書く方法

義務教育の日本語♯プロの日本語 24

小学校だよりを徹底改造する 27

「読者の気持ち」を考える 32

「Google 翻訳」が訳せる文章を書く 35

1文を短くするには 39

くどい表現はやめよう 42

引用は適度な長さに 45

「中二病」は滅ぼそう 48

型がない人の「型破り」禁止 51

第2章 ユニバーサル日本語の文章術（実践編）

日本語の書き言葉は特殊である 54

デキるやつは「新人」か「私」か 55

第 **3** 章 ユニバーサル日本語 VS 漢字 81

読点をどう打つか 57

句読点は40文字に1回くらい 58

もっと改行したい 60

「ライター志望者の必読書」でも読みにくい 64

やわらかいひらがな、縦書きに向かないアルファベット 67

文章は「文字の混ぜご飯」である 74

文章のボリュームアップとダイエツトの方法 76

無理して漢字で書かなくていい 82

和語・漢語・外来語 84

漢字を「ひらく」方法について 88

「表記ブレ」をなくそう 97

第4章 最強のビジネスメールを書く方法

109

誤字脱字・誤表記をなくす

100

ドラエモンは信用できない

102

「信長のように大胆な改革」は信用できない

104

メールはすぐく「めんどくさい」

110

お世話をしたおぼえもないのに

112

「お世話になっております」の起源

114

村上龍のメール指南書から考えるSlackマナー

118

「黒のリクスー女子」の氾濫とメール文体

122

「お世話になっております」を使うとき

126

「お世話になっております」を使わない書きおこし

130

ビジネスメール術③ メールを締めくくる前の一時間

133

ビジネスメール術①

ビジネスメール術②

ビジネスメール術③

第5章 絶対に「失敗」しないツイッター文章術

157

ビジネスメール術④ 丁寧な言葉の使いかた 136

ビジネスメール術⑤ 失礼にならない書きかた 140

ビジネスメール術⑥ メール文章の効率的な省略法 147

ビジネスメール術【番外】 おじさんメールを排除する 152

日本人の4割弱がツイッター利用者？ 158

ツイッターの「成功」はマニュアル化できない 161

ひとまず役立つツイッター文章術 164

文章を140文字に圧縮する方法 168

意識高い系は上流層からウケない 172

瞬速の貴公子が暗黒卿に変わった話 175

ツイッターの公式アカウント担当者を選抜する方法 177

第
6
章

伝わるLINE、

モテるマッチングアプリの表現戦略

シャープ公式と法務省アカウントの明暗をわけたもの
180

「半年ROMってろ」という教訓
183

日本人の8割以上が利用する情報インフラの文章術は？
186

LINEでも「公言できないことは言わない」
188

メンタリストDaigoと小泉純一郎に学ぶ恋愛術
192

「本間にうれピー」が失わせるもの
198

婚活アプリは自己紹介冒頭の60字で勝負がついている
201

「出会いがなくて登録しました」をやめよう
205

ハイレベルなプロフィールを考える
208

第7章

自在に数百万PVを叩き出して

ウェブ記事を「激バズ」させるコツ

215

月間100万PVのブログは余裕で作れる 216

謎の現象「バズリ」を考察する 218

ウェブは「バカと暇人と貧乏人」のもの 221

「ウケる要素」を複合せればバズる 227

コロナ禍で無双する「愛国ブルマおじさん」 233

半自動的にPV数を稼ぐネットウヨワード 236

バズるパワーワードの作りかた 239

PVを稼ぐか、ブランドイメージか 247

紙媒体とウェブ媒体の文章術

紙とウェブの違いは「バイオリンとエレキギター」 252

くだけたメディアⅡウェブ媒体 255

紙とウェブの文章はここまで違う 258

集中できる縦書き VS 平易な横書き 261

「持久走」執筆と「ジョギング」執筆 265

「1行アキ」という特殊ルール 270

ウェブに向く記事、向かない記事 272

ウェブ媒体は「間違ってもいい」メディアか 274

どんどん拡散するウェブ文章 278

「炎上」するパターン 281

「表現の自由」がない令和の日本の文章術 286

おわりに
289

インタビューのコツとNG行動
289

文章さえ上手なら生きていける
294

第

1

章

誰でも読める「プロの日本語」を書く方法

義務教育の日本語≠プロの日本語

日本語の文章は2種類ある。

それはプロの技術で書かれた文章と、そうでない文章だ――。

と、いきなり敷衍が高そうなことを書いたが、読者をおどかしたいわけではない。

ここでいうプロの文章とは、本書の「はじめに」でも言及した「ユニバーサル日本語」で書かれた文章のことだ。

なお、この概念は私の独創ではない。いまから10年以上前、駆け出し時代に手に取った『年収1000万円！ 稼ぐ「ライター」の仕事術』（同文館出版）という本で、著者の吉田典史氏が「商業日本語」と呼んでいたものとはほぼ同じものを指している。

同書の表現を借りれば、「商業日本語」は「誰が読んでも内容がすぐわかる文章」で、「読む側に負担を強^しいることがない」「予備知識がなくても1回読んだだけで、内容がすっと頭に入って」くる書き言葉だ。世の中で商業流通している書籍や雑誌の多くはこうした文章で書かれている。

私が見るところ、商業日本語のノウハウは、ブログの記事やSNSの投稿、LINEを

使った日常的なコミュニケーションなど、商用的ではない場面でもひろく応用できる（ちなみに吉田氏の著書が刊行されたのは2008年で、まだスマホやSNSが十分に普及していなかった時代だ）。

なので、私はこの「商業日本語」に近い概念を「ユニバーサル日本語」と呼ぶ。

ユニバーサル日本語の文章術とは、日本で普通の教育（義務教育）を受けた人なら、誰にでも簡単に意味が理解できる、読みやすい日本語を書くスキルのことだ。

当然、しっかり訓練すれば誰にでも習得が可能である。生まれつきの文学センスなどはほとんど関係がない実用的なノウハウだ。

注意してほしいのは、これは学校で習う「ただしい日本語」を使った作文の書きかたとは、似て非なる技術だということだ。

たとえば次の文章を読んでみてほしい。こちらは間違いなく「ただしい日本語」が使われているが、ユニバーサル日本語で書かれた文章ではない。

新入生106名を迎え、昨日、4月9日に、出席者が限られたなかではありましたが、

令和2年度の入学式を行うことができ、全校児童659名で、令和2年度（2020年度）がスタートしました。

とりわけ今年度は、思いもよらないかたちでの出発となり、また、今後の予測もつかない状況となっています。3月の一斉休校に続く休校措置で、子どもたちのなかには、生活のリズムを崩したり、長引く自宅での待機によりストレスを抱えたりしている児童もいるのでは…と心配しているところですよ。

〔滋賀県東近江市立能登川南小学校〕令和2年度学校だより4月号「つながり みなみ」【No.1】

http://www2.higashionied.jp/nominanisho/?action=common_download_main&upload_id=4184

こちらは私が28年前に卒業した小学校（通称「南小」）のホームページに、たまたま掲載されていた「学校だより」の文章である。プロ的ではない文章のサンプルとして紹介するのは気がひけるが、卒業生の肩書きに免じて勘弁してほしい。

通常、学校だよりを書いている人は学校の先生だ。

特に小学校であれば国語教育にもたずさわっている可能性が高い。

そのため今回の例文も、文法的小おかしな部分は何もない「ただしい日本語」だ。

校長先生が始業式で話した言葉を、そのまま文章におこしたのかもしれない。こうした文体は、中小企業の社内報や年配者の手紙文などでもしばしば見られる。

しかし、世間でひろく商業流通している新聞や雑誌ではまず見かけない文章でもある。

小学校だよりを徹底改造する

そこで、この例文をユニバーサル日本語の技術を使って修正してみたい。たとえばこんなふうには書きかえるのはどうだろうか。

4月9日、出席者を限った形式ながら、令和2年度（2020年度）の入学式をおこなうことができました。新入生106名を迎え、全校児童659名での新学期のスタートです。

今年度は思いがけぬコロナ禍に見舞われ、今後の予測がつかない状況です。前年度末の3月2日に、政府から一斉臨時休校の要請を受けて以来、休校措置は現在も続いています。自宅での待機が長引くことで、生活リズムを崩したり、ストレスを抱えたりした

子どもたちもいるのでは……と、学校としても心配しています。

文字数は226文字。原文とまったく同じだ。

まだまだ修正の余地はありそうだが、ひとまずわかりやすくなったのではないだろうか。ここで私が加えた作業は左の7点である。

① 1文を短くした

原文の1段落目は、読点「、」が6つも使われて1文が長くなっていた。だが、1文は可能な範囲で短くしたほうが読みやすい。修正例では2文にわけることにした。

読点「、」は便利なので、つい多用しがちだ。意識的に句点「。」を使って文を区切るようにしたい（もちろん、読点がまったくない文章もダメである）。

② 「5W1H」を冒頭に持ってきた

「4月9日」という日付を1段落目1文目の冒頭部分に持ってきた。5W1H（いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように）のどれかの要素が、早い段階で明らかになると、文

は読みやすくなる。

③ 受け身形をやめた

「出席者が限られた」を「出席者を限った」と書きかえた。語気がやわらかくなるためか、口語ではつい受け身形を多用しやすい。しかし、文章にすると冗長な印象になる。しかも文節ごとに主語が変わりやすくなるので、読みにくくなってしまう。

④ 表記を統一した

全角数字の「106名」と半角数字の「2020年度」のように、全角と半角の表記がそろっていない文章は丁寧さに欠けた印象になる。特に紙に印刷した場合は悪目立ちするので、表記を統一しておきたい。

また、今回の原文では問題なかったものの、「一〇六名」と「令和2年度」のように、漢数字とアラビア数字の混用もよくない。

⑤ 当事者以外は理解できない部分を具体的に書きかえた

この文章は、日本国内で新型コロナウイルスの流行第1波が起きていた2020年4月10日に書かれたものだ（なお、日本政府が東京都をはじめ大都市部を対象に緊急事態宣言を出したのは4月7日、対象を全国に拡大したのは4月16日だ）。

そのため、原文の「思いもよらないかたちでの出発」「今後の予測もつかない状況」「3月の一斉休校に続く休校措置」などが具体的に何を意味しているかは、当時の南小の教員や保護者にとって、言わずもがなの情報だったはずだろう。むしろかしい言葉でいえば、この「学校だより」の作者と読者は、前後の脈絡や背景をわざわざ言語化するまでもなく共有しているハイコンテクストな関係性にあった。

しかし、この本（2022年1月刊行）を手にとっている読者にとって、コロナ第1波はすでに2年前の出来事である。その後、日本ではウイルス流行の「第〇波」と緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発令が何度も繰り返えされ、東京オリンピックピックも開催された。

かつてコロナ第1波のときに、緊急事態宣言や休校処置がいつ出されていつ終わったか、いまや正確に記憶している人はほとんどいないだろう（かくいう私自身も、この原稿を書くにあたってわざわざ調べなおした）。そもそも第1波の当時までさえ、就学年齢の子どもがいない人は、今回の「学校だより」の記述にピンとこない部分が数多くあったはずだ。

読みやすい文章とは、前提になる知識や情報を共有していない人でも、一読しただけで意味が通じる文章のことである。すなわち、著者と読者の関係が希薄で、それぞれが別の時間・場所・バックグラウンドに身を置いていても（＝ローコンテクストな関係でも）ちゃんと理解ができるように書かれていなくてはならない。

私が書きかえた文章では「コロナ禍」や「政府からの臨時休校要請」などの具体的な文言をおぎなった。こうすれば、コンテクストを共有していない人にも文意が伝わる。

⑥ 冗長な文言を削った

たとえば、原文の「とりわけ今年度は、思いもよらないかたちでの出発となり、また、今後の予測もつかない状況となっております」は、「思いもよらない」「予測もつかない」と似た意味であるうえ「くない」という言い回しが重複した言葉が、1文のなかで繰り返さされている。くどくなってしまうので、言いかえたほうがいい。

⑦ 動作の主体をしめした

原文の「長引く自宅での待機によりストレスを抱えたりしている児童もいるのでは…」と

心配しているところですよ」は、いったい誰が「心配している」のかがわかりにくい。

そこで「学校としても」という動作の主体をおぎなった。

1文を短くする、簡潔な文法で書く、具体的な言葉をおぎなう。これが「ユニバーサル日本語」を身につける第一歩である。

「読者の気持ち」を考える

学生時代、「作者の気持ち」を答えさせる国語の問題に悩んだ人も多いだろう。

そもそも作者本人からして、実は文章を書くときに何も考えていない場合が多々ある。私自身、過去に入試問題に使われた著作を執筆したときの作者の気持ちは「締め切りを破ったら編集者に怒られるなあ」だった――。

という余談はさておき、わが国の国語のテストでは、作者の表現の意図や、文章が伝える内容を問う設問が多い。

理由は想像がつく。日本の国語教育には、文章を読むときに内容を理解するコストを読者に負担させることが当然だと考える思想があるからだ。

あなたがいま読まされている文章は、一読しただけでは意味がわからないかもしれない。しかし、作者はすぐくエライ先生である。エライ人が意味のないことをお書きになるはずがない。仮に文意が理解できないとすれば、それは先生のお気持ちを察することができない読者の精神がたるんでいいるせいだ。悪いのは自分なので反省するべし——。

そんな殿様商売的な思想が存在すると言えば、さすがに言いすぎだろうか。

とはいえ事実として、日本の国語教育は、前近代に寺子屋などでおこなわれていた教育がルーツのひとつになっている。つまり、中国古典や仏典などの立派な文章をあがめたてまつり、聖人（作者）の意図を推しはかるといふ文章の読みかただ。

テキストを道徳的に行きたいものとみなし、唯一の正しい解釈を追い求めるような国語教育のありかたは、戦後も相当長い期間にわたり続いた。「作者の気持ち」を答えさせる設問も、こうした風土を背景に生まれた。

1998年からは学習指導要領の改訂でこの方針が大きく変わった。とはいえ、「作者の気持ち」を尋ねる問題は大学入試などの場であいかかわらず現役だ。

つまり、現在でもなお、国語のテストでみられる作者（「情報の送り手」と読者（「情報の受け手」）の関係は、次のようになっているのだ。

作者 √√√ 読者

しかし、ユニバーサル日本語を書くにあたって、こうした姿勢は大間違いだ。

文意が伝わらないときは、相手よりもまず自分に非がないかを考えるべきである。

わかりやすい文章を書くときに必要なのは、実は作者の気持ちではなく「読者の気持ち」だ。読者を気持ち悪くさせてはいけない。ほどほどに簡潔で、日本語を母語とする人間の目に触れたときにもっとも違和感なく受容される書きかたこそが求められる。

ゆえに望ましいのはこういう形である。

読者 √ 作者

もつとも、いきなり読者の気持ちを想像しろと言われても困るかもしれない。慣れていない人は、不特定多数の読み手を想定する行為それ自体のハードルが高いはずだ。

そこで私がおすすめするのは、「自分のなかの他者」を呼びだすことだ。

——まっさきに動員してほしいのは、15歳のときの自分である。

なぜ15歳かといえは、日本国民としての義務教育を修了したレベル（中学3年生）の読解

能力をイメージしてほしいからだ（なので、国語が得意だった人や、中学受験でむずかしい問題に取り組んだ経験がある人は、年齢設定を12歳くらいに引き下げてもいい）。

私自身、一般向けの本を書くときは過去の自分を想定読者に行っている。

つまり15歳の自分に予備知識ゼロであたえても最後まで読めて、内容が理解できる書きかたを意識しているのだ。

こうすれば、平均的な国語力を持つ世間の大人なら誰にでも必ず意味が通じる文章ができあがる。かといって、簡単すぎる「幼稚」な文章を書く危険もない。

なぜなら読者は過去のあなた自身だからである。

おそらく15歳だったあなたは、「作者の気持ち」を考えさせるエライ先生の文章は大嫌いだったはずだが、かといって幼稚な文章も読みたくなかったはずなのだ。

「Google 翻訳」が訳せる文章を書く

とはいえ、こうした努力だけではうまくいかないほど「書く」ことが苦手な人もいる。

極端に言えば、次のような文章を書いてしまう人だ。

私は平和堂で野菜買いに行つて、お客様にセールで売つてたし、5時やつたしタマゴ6個が150円で買つて帰つたから、タンメンやめて親子丼作らされた。京進の日やら新快が出る前にミカちゃんに食べさせた。

解読を試みる。

きつと、この人はスーパーに野菜を買いに行つたら、17時からのタイムセールでタマゴが安く売られていたので6個を150円で購入したのだ。当初、野菜でタンメンを作るつもりだったが、タマゴを買つたので親子丼にメニューを変更したと思われる。そして、この日は子どもの塾があるので、通塾のために乗る電車に間に合う時間までに夕食として食べさせたのではないか。

とはいえ、どれだけ努力しても完全に正確な解読は不可能だ。理由は2点ある。

ひとつめは、先の南小「学校だより」と同じく、非常にハイコンテクストな書きかたがなされているからだ。つまり、この文章は書いた人と生活圏を同じくしていて、親しい関係をむすんでいる人しか意味をつかめない。

たとえば文中の「平和堂」は滋賀県彦根市に本社を置くスーパーのチェーン店だ。「京進」は京都府と滋賀県を中心に展開している学習塾で、「新快」は京阪神・中京地区のJR線で運行されている快速列車「新快速」の略称である。いずれも他の地方の人は耳慣れない固有名詞だろう。

「ミカちゃん」はおそらく娘の名前だ。だが、親戚や近所の子かもしれない。滋賀県知事の三日月大造みかづきたいぞうさん（50歳）を指している可能性すらゼロではない。対象の人間関係を正確に把握している人でなければよくわからないわけだ。

とはいえ、これらは文中に詳しい説明を書きこむか、もしくは情報の核心的な部分を伝えるうえで重要性が低い「平和堂」「京進」「ミカちゃん」「新快」という固有名詞を「スーパー」「学習塾」「娘」「快速列車」のような一般名詞に置きかえてしまえば解決できる。もつと深刻な問題は、文法的な間違いが多すぎることだ。

多くの内容を詰めこんで長い1文を書いたことで文法が乱れてしまい、能動態と受動態（受け身形）がメチャクチャ、さらにテニヲハ（助詞の使いかた）がおかしく、文の途中で主語が転換している。さらに口語表現（この場合は方言）が使われているらしき部分もある。

仮に固有名詞が簡単なものに書きかえられていても、解読に骨が折れる「悪文」だ。

この手の「悪文」のクセが染みついた人に、まず試してほしい文章改善術がある。

文章を書くときに、その文が高校受験の和文英訳問題として出題された場合にちゃんと回答できる人がいるか、常に考える習慣をつけることだ。

もしくは、Google翻訳やDeepLのようなウェブ上の自動翻訳サービスに原文を入力したときに、スムーズに翻訳されるか、頭のなかでイメージしてもいい。

もちろん本当に翻訳する必要はないので、個々の単語に対応した英単語を知っている必要はない。また、知っている外国語であれば、英語ではなく中国語でもスワヒリ語でもかまわない。ここで言いたいのは、ちゃんと外国語に翻訳できる文は、日本語としても間違**いなく意味が通る**ということだ。

すくなくとも2022年時点の世界では、オンラインで無料で提供されている翻訳サービスの読解力は人間の読解力よりも低い。なので、翻訳サービスが誤読をしない文章は、生身の人間からも理解されやすい。意味が明確な文章ということになる。

極端なことをいえば、どの一文をGoogle翻訳に放りこんでも、ちゃんと意味が通じる外国語に自動翻訳される文章を書く。それがユニバーサル日本語の究極の理想である。

1文を短くするには

翻訳しやすい文章の条件として、まず思い浮かぶのは「1文が短い」ことだ。

たとえば英訳するでしょう。1文が長ければ、関係代名詞や分詞構文といった、ややこしい文法を駆使した複雑な訳文を作らなくてはならない。自力で翻訳する場合でもめんどろくさいし、Google翻訳を使った場合は正確に翻訳されない可能性がかなり高くなる。

1文が長い文は、情報を処理する負荷が高いため読みにくいわけである。

逆にいえば1文を短くするだけで、文章はある程度までなら簡潔になる。

個人的な感覚を述べるなら、事例をA・B・C……と単純に列挙していくようなケースをのぞけば、1文は最長でも100字くらいにとどめておくと読みやすくなる。この本のフォーマットでいえば2行半くらいの分量だ。

1文を短くするとき、まず確認してほしいのは文中の接続助詞「が」である。

以下にとっても悪い例を載せておく。

私は札幌のホテルにチェックインしたが、1泊4000円だが駅前に位置していて、

観光地や繁華街へのアクセスがいいが、現在は緊急事態宣言が発令されていて多くの店が閉まっていたが、なかには営業を続けている店もあって、北海道の名物はジンギスカンだが、1人で食べるのはちょっと味気ないが、訪れた店はなかなか美味だったが、ネットのレビューサイトの評価を見ると散々なようで、残念なのだが、もしかすると札幌市内ではハズレとっていい店だったのかもしれないが、私は満足したのだ。

ひどい悪文だが、身に覚えがある人もいるだろう。私自身も含めて、眠いときや忙しいときに推敲しないままSNSに書きこむと、こういう文章を書きがちなのだ。

日本語の接続助詞「が」は便利な言葉で、順接にも逆接にも使える。しかし、それゆえに前後の文脈のつながりがわかりにくく、読者にとって読みにくい文章を生みがちだ（つまり、文章を「Google翻訳」にかけた場合の翻訳ミスが増える）。

また、「が」を多用すると1文が無限にダラダラと続き、文にしまりがなくなる。文章のリズムも単調になる。

例文を書き直してみよう。

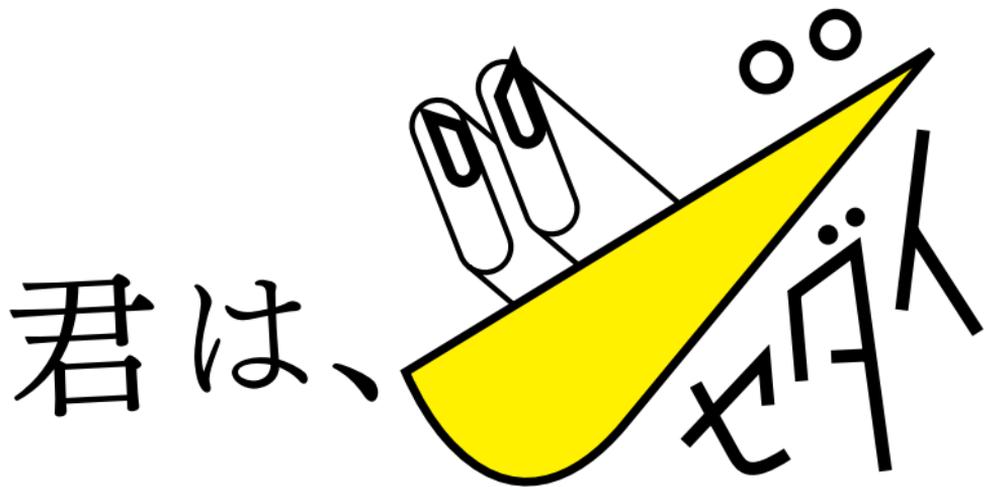
私は札幌のホテルにチェックインした。1泊4000円だが駅前位置していて、観光地や繁華街へのアクセスがいい。現在は緊急事態宣言が発令されていて多くの店が閉まっていたが、なかには営業を続けている店もあった。北海道の名物はジンギスカンだ。だが、1人で食べるのはちょっと味気ない。私が訪れた店はなかなか美味だったが、ネットのレビューサイトの評価を見ると散々なようで、残念だった。もしかすると札幌市内ではハズレとっていい店だったのかもしれない。だが、私は満足したのだ。

順接の「が」をすべて削り、句点を入れて2文に区切った。

順接で使う「が」は、できるだけひかえるのが好ましい（とはいえ完全になくすと非常に文章を書きにくくなるので、ある程度までは仕方がないところもある）。

いっぽう、逆説の「が」の使用は、あまり目くじらを立てなくていい。ただ、「〜であるもの」「〜とはいえ」「〜ながら」など、可能な範囲で別の表現を考える習慣は持ちたい。「だが」「しかし」といった接続詞をはさんで、2文に区切れないかを試すのもいい。

こうすれば文章が単調にならずにすむからだ。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!